

---

# 次行きましょ、次！

森永パピ子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

次行きましよ、次！

### 【Nコード】

N6418V

### 【作者名】

森永パピ子

### 【あらすじ】

深夜のテンション短編。福岡のどこかで飲み屋で交わされる男女の下ネタ全開ラブ(??)トーク。恋愛前提です。一部ローカルネタなのでわかりにくいですがご了承下さい。可愛い博多弁を喋る女の子はでてきません。

「あゝ、マジないわゝ。アレ。ないわゝ……」

盛大な溜息とともに湿度70パーセントの愚痴。しかも十秒前にも聞いた同じ台詞。うだつの上がない男と女の週休二日制の土曜の夜。

「私、生頼みますよ。瀬川さんは？」

「大ジョッキね！ 倉橋、つまみ頼め！ だいたいおまえは食わなすぎたい！ 食え！」

「そんなこといわれても、私だって花の二十五歳ですよ？ オシヤレしたいんですよ、痩せたいんですよ！」

「ガリガリに痩せやがって、ガリガリガリクソンかつつの！」

「意味不明です。すんまつせーん！ 生大ジョッキと中ジョッキ！ あと、なんこつからあげ一つとぼんじりと皮タレとニンニクバラ巻き二つずつ！」

はーいただいたいまー！ とおっちゃんの明るい声が返ってくる。狭いながらも、仕事帰りのサラリーマンたちで溢れている焼き鳥屋。男ばかりの店内に女はなんと私だけ。福岡天神博多大丸エルガラ（地名盛り込みすぎ）で買った23区の白いサマーニットのアンサンブルが号泣だ。

「オシヤレしたい花の二十五歳はどこ行ったとや。ニンニクとかマジ俺チヨイスぜ、それ。おっさんやんか」

油の染みついた小さな木目のテーブルを挟んで向かい合っているのは、職場の上司の瀬川淳平さん。上司といっても歳の差は五つ。見た目は男前なのに、いかんせんだらし無い性格が滲み出ている。のびっぱなしの髪に無精髭。タンクトップの上からよれた柄シャツ（青系のペイズリー）を羽織って、インディアン風の飾りがついたハーフジーンズにサンダル。今時、丘サーファーもやらないようなハイパークールビズつぶりを発揮している。

「いや、瀬川さんの前で女子力開花させても……」  
どーせ対象外やろうもん！ とブチ切れてしまいたいのをグツと堪える。

「はいはいどーせ俺は小汚いおっさんですから？ おまえみたいにハイソに着飾った女ん子にや見向きもされませんけど。でもおまえは中身がおっさんやけんなあ」

はい、馬鹿！！ あんたの醸すしよぼくれた若人とおっさんの絶妙なハーモニーがどんなに私を惑わしているのか、全くわかっていない！ そのうえ接待で行ったレベルの低いおさわりキャバで彼女が働いていたとか、いとバロス！ しかも、逆ギレされて振られたとか、マジ九州男児終了のお知らせ。

つつい最近マイブームのネット掲示板サーフィンで覚えた単語が浮かぶ辺り私もだいぶ終わっているけどな！！

「中身おっさんでも、見た目は女子全開っしょ？ なんなら文字通り一肌脱ぎましようか？ これから今泉のラブホでも行きます？」

「はあ？ なんそれ。カンチ、セックスしよってか？ おまえ赤名リカかつつうの」

「はいはい。すんまっせん。ったく。これやけんおっさんは、無駄に身持ち固くなりやがってつまらん。どうせならチンコ固くしろつつうの」

「おまつ、ちょ、おまえ！ それでも女か！！ いやああサイテ  
ー……」

酔っ払っているとはいえ、こんな下ネタを余裕で交わせる時点で恋の花は根腐れしてる。

「せっかく可愛い部下が慰めてあげようって言いよーとに！」

私はテーブルに肘をつけて煙草をくわえる。大きな手に小さな安物ライターを握り、太い腕が伸びてきた。はあ、マジ濡れる。腕まくりした袖からむき出しの血管の浮いた『THE・筋肉質』な上腕二等筋。

「馬鹿やね。おまえ。これでも俺、傷心の身ぜ。本気にしたらどう

すつとや?」

火をつけてもらいながら、私の耳のノイズキャンセラーが作動する。

「そりゃ、据え膳食わぬは女の恥でしょうもん。美味しく召し上がりますけど?」

駄目もとで攻めの一手。煙を吐き出しながらチラ見で表情を確認すると、瀬川さんは自分の煙草に火をつけながら、視線を落としていた。

「いやいや、おまえ女ん子なら自分を大事にせな。あれやる? おまえ彼氏おらんけん、やけになつとつちやる」

出た。出たよ。おっさんの情け。女の子なら自分大切に。なに? 私は下した腸で、てめえはビオフェルミンかつつの。男は狼なのよって歌ってた奴出て来い。私のWANONANOのヒールが火を噴くぜ。

ふて腐れて黙ったまま煙草をふかしていると、妙な沈黙が蔓延した。

「え。まさか。なに? 本気で?」

おまえの思考伝達物質なんしよつとか! 生理でもないのにイライラして瀬川さんを睨みつけると、アカラサマに狼狽している。えっ、なにこの子可愛い。お持ち帰りおいくら万円?

「ええええ。ちよつとそれいかんって。月曜から俺、職場でお前にどんな顔すりゃいいの、おまえは一夜のアバンチュールでも、俺に恋心芽生えちゃったらどーすつとや?! もうおまえにウンコしてくるとか言えんくなるやん!」

心配事のカテゴリーズが小学生。うんこがメインってどうなの三十路。

「別に瀬川さんならセックスの二回や三回したら翌朝うんこしてえって普通に言つようになるでしょ」

「え、ちょ、待って。せめて三ヶ月! まだ俺振られたばっかやし! っっていうか、これが三十路のモテ期?! 俺今絶賛モテカワ愛

「され中?!」

「なんですか。他に言い寄ってくる女ありけりですか。モテ期」

受付の水っぱいケバ嬢軍団が瀬川さんを狙っているのは前からチエック済みだ。やばい。私に対しては熊本城ばりの難攻不落度を誇っているが、ああいういかにもって女の子に対しては一夜城並みの突貫工事っぷりを発揮するに違いない。

「いや、他は知らん。振られたのもおまえにしか話したらんし」

馬鹿アア! どうしておまえは私の乙女心の隙間をそう易々と突いてくるのか。どうせ突くなら性的に具体的に奥まで突いて頂きたい。ああ、私の思考回終わっとる。

「ごめーん。おまたせー」

女子高生とにわかせんぺいの名フレーズを足して二で割ったような明るい声で、おばちゃんが生を運んできた。

コラ、性欲! また喧嘩してきたっちやる! 過ちば犯してきんしゃい! 過ちば! たまにーは、理性にまーけてこーい。ごめーん。

思考回路ラリってる。もういいよ。サヨナラ恋心。私はやけくそでジョッキを呷った。

「ぶはー! おばちゃん黒霧ロックで!!」

ダン! と底をテーブルに叩きつけ、人差し指を立てる。

「おねえちゃんいい飲みっぷりやねー!。彼氏連れて帰るの大変やないとー?」

「あははは! 彼氏って。おばちゃんこれ上司やけんねー」

「これ言つな。油断して酔っ払つてると、本気で今泉連れてくぞ」  
低い声に思わず瀬川さんを凝視する。自分で言っただけで照れんなよ!  
両手で顔面を覆いながらプルプル震えている姿に思わず吹いてしまった。

私は瀬川さんの肩を指で叩き、耳打ちする。

(私、そうなったら、めちゃくちゃ乱れちゃうと思うんで、覚悟しといてくださいね)

(俺、ねちっこいらしいんやけど、そういうのありなん?)

(うわ。きんもー！でも、濡れました)

くすくすと笑いあいながら交互に耳打ちが続く。耳朶にかかる熱い吐息。どうしようもない酔っ払いだ。

(いかん。ちよっとおっきました)

(おっきいうな。触りたくなるやないですか)

(俺だって濡れたとか言われたら触りたくなる)

お互い会話の低レベル加減に、ぷつと吹きだして笑いあう。悪戯心が湧いてテーブルの下にそつと手を伸ばした。ちよっとおっきのサイズかコレ！しかしまだ柔らかさがあるところを察するとあながち誇張ではないかもしれぬ。

「でも、俺。今日は我慢するわ」

「ええ！そこまで言っとお預けですか?!」

「やけんイイヤんか。性欲+愛情+我慢×時間〓やばいセックス。やっぱコレやる」

「うわ卑猥」

「やかましい。俺だって辛いつちゃけん、おまえも我慢しろ」

私は快諾する。月曜日に職場であつたら瀬川さんはどんな顔をするのだろうか。

「おばちゃん、ごめん。黒霧、おいちゃんにあげるけん、焼き鳥はお持ち帰りでー。お勘定してタクシーも二台お願いします」

「ええー残念やねーでもありがとーおじちゃん焼酎好きやけん喜ばーね。ちよっと待っててねー」

「おねーちゃんありがとーねー」

屈託のない夫婦に感謝され、ちよっと後ろめたい気もしなくはないが、しかたがない。

財布を取り出した私を制して、瀬川さんが席を立った。

上司だろうが仕事から離れて付き合ってもない男に奢ってもらうのは気を使うので割り勘だと断固譲らなかつた私の主義を覚えていたらしい。

本気出してきた男の背中が大きく映る。あの僧帽筋と肩甲骨。はやく剥いて生で拝んでみたい。んでもってフルサイズの真偽のところ確かめなくては。っていうか、いつまで我慢？ 三ヶ月か？ 三ヶ月我慢したらその思いは本物？ おい、そんな女子高生伝説、私は信じちゃいないんぞ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6418v/>

---

次行きましょ、次！

2011年8月10日03時28分発行